

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problems Mailbox.

⑩ 日本国特許庁

公開特許公報

⑪ 特開昭 50-76072

⑫ 公開日 昭50(1975) 6.21

⑬ 特願昭 48-125187

⑭ 出願日 昭48(1973) 11.7

審査請求 未請求 (全7頁)

序内登録番号 7043 44

7306 44
6855 44
6855 44

⑮ 日本分類

C07D213/62
C07D213/81
C07D213/84
C07D215/20
C07D217/241
A61K 31/44
A61K 31/47

特許庁長官印

4発明の名稱

カルボキシル基を有する芳香族化合物の製造法
2類、即ち
カルボキシル基とホスホジエチレングリコール基の2種類の官能基をもつた
大阪府大阪市住吉区豊島町ノ103
三田一郎三 (はか/名)

3的所出口人 口袋番号 301
大阪府大阪市住吉区豊島町ノ103
1981年8月1日
代表者 吉岡三
代取人 口袋番号 533
大阪府大阪市住吉区豊島町ノ103
紅葉園株式会社(電話06-455-5861)
外國士(セイヨウシ) 岩崎光
4取付口印の回数
5明細書
6役任状
7回 口袋番号 48-125187

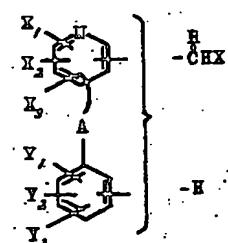
明細書

1発明の名稱

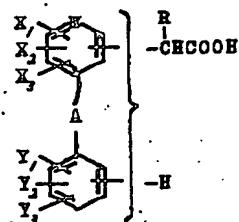
口袋詰め物の製造法

2特許請求の範囲

一般式



[式中、X₁、X₂、X₃、Y₁、Y₂、Y₃およびAはそれぞれ水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシ基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、ジアノ基、トリフルオロメチル基、あるいはハロゲンを表わし、これらの官能基のうちの任意の2官能基が結合してピリジン環あるいはベンゼン環に結合する官能基あるいはベンゼン環を形成してもよく、Rはハロゲンを表わし、Aは口袋あるいは袋質を表わす。]



[式中、X₁、X₂、X₃、Y₁、Y₂、Y₃、AおよびRは前記と同様を表わす。]

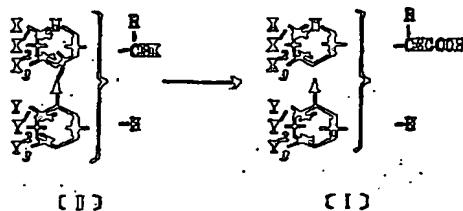
で示される化合物を得ることを特徴とする口袋詰め物の製造法。

3発明の詳細な説明

本発明は口袋詰め物の製造法に属し、さもなくば併しあはされた抗炎症作用(抗リウマチ作用を含む)および鎮痛作用を示し、医薬またはその成分中口袋として有用な口袋詰め物の製造法に

図する。

本発明方法の実質は次式によつて示される。



[式中、XはX₁、X₂、X₃、X₄、Y₁、Y₂、Y₃、Y₄およびY₅はそれぞれ水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシ基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、ジアノ基、ホウ素基、アシルオキシ基、アシルアミノ基、トリフルオロメチル基あるいはハロゲンを表わし、これらの置換基のうちの任意の2置換基が結合してビリクサン基あるいはベンゼン環に結合する置換あるいはベンゼン環を形成してもよく、Xはハロゲンを表わし、△は置換あるいは置換をひらかし、且は水素あるいは低級アルキル基を表わす。ただし、上記一般式-(CH₂)_n-で表わされる置換基は2個の置換基により形成されたベンゼン環上に存在し

てもよい。]

本発明方法は一般式(Ⅱ)で示されるハロゲンアルキル置換体をカルボキシル化反応に付して一般式(Ⅰ)で示される対応する置換アルキル置換体を得ることを目的とする。

本発明方法の原料化合物(Ⅱ)は対応するアルコール化合物をハロゲン化水素(ハロゲン化チオニルあるいはハロゲン化リン)によって當法通りハロゲン化することにより得られる。

この原料化合物(Ⅱ)は一般式において示されるごとくアルキル基(例えばメチル、エチル、イソプロピル、イソブチル)、アルコキシ基(例えばメトキシ、エトキシ、プロポキシ、イソブチキシ)、カルボキシ基、カルバモイル基、ニトロ基、アミノ基、シアノ基、ホウ素基、ブシリオキシ基(例えばアセチルオキシ、プロピオニルオキシ、ブチリルオキシ)、アシルアミノ基(例えばアルキルアシルアミノ、無極性のアシルアミノ、アリールアシルアミノ)、トリフルオロメチル基あるいはハロゲン(例えば臭素、溴素)か

ら選ばれる同一または組合なる1～3個の置換基によって各々ベンゼン環およびビリクサン環が置換されていてもよい有機ハロゲン化合物である。

本発明方法の実質においては通常ベンゼン環ハロゲン化物に対して用いられるすべてのカルボキシル化方法を用い得るが、その3、4を例示すると次のとおりである。

まず一例としてはハロゲンアルキル置換体(Ⅱ)のハロゲン原子をシアノ基に置換する。この反応は不活性溶媒(例えば、ピリジン、ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシド、ノーマルユーピロリドン、水、メタノール、エタノール)中シアノ化試薬(例えば、シアノ化鉄一鉄、シアノ化ナトリウム、シアノ化カリウム、ベンジルトリメチルアンモニウムシアナイト)を使用して通常加熱下に実施される。なお、ヨウ化ナトリウム、ヨウ素-ヨウ化カリウムを加えて反応の促進を図つてもよい。次いで得られたシアノアルキル置換体のシアノ基をカルボキシル基に変換するため加水分解に付す。この加水分解は當法に従つて行え

ばよく、酸性条件下あるいは弱基性条件下のいずれでおこなつてもよい。酸としては硫酸、硝酸、塩酸、またはこれらと有機酸(例えば、酢酸)などとの混合物を用いることができ、弱酸としては水酸化アルカリ、炭酸アルカリなどが用いられ、水あるいは水溶性酸の存在下で加熱することにより実現される。

さらに他の方法としてはグリニヤール試薬をカルボキシル化する方法がある。すなわち、ハロゲン化アルキル置換体(Ⅱ)に常法どおり金属性マグネシウムを反応させてグリニヤール試薬をつくり、これに冷却下二級化試薬を導入するかまたは固体炭酸と反応させ次いで加水分解に付すことにより目的とする置換アルキル置換体が得られる。グリニヤール試薬の取扱い上の為密閉気流中で反応を行うこと、ヨウドあるいは臭化エチルなどの添加剤を加えること、その強烈なグリニヤール試薬によるカルボン酸合成の反応条件は本発明方法実質の際にも同様に用い得る。

また、アルカリ金属化合物と炭酸によるカルボ

ンの合成法も利用できる。一般にはハロゲノアルキル金属化合物〔Ⅱ〕にブチルリチウムを反応させてリチウム化合物とした後これに二回化炭素を導入することにより目的化合物〔Ⅰ〕を得る。この方法においてブチルリチウムの代りにブロムベンゼンとリチウムまたは砂状ナトリウムアマルガムを用いること、二回化炭素の代りに固体炭酸を用いることなども通常のアルカリ金属化合物によるカルボン酸の合成と同じである。

なおこれらのカルボキシル化反応中に変化を受けるビリジンあるいはベンゼン環上の置換基はカルボキシル化反応前に適当な保護基で保護しておき反応終了後保護基をはずすこと、あるいは反応中に加水分解の変化を防げた後これを反応終了後が直面して他の置換基にもどすことなども必要に応じて各自されてよい。

本発明方法においては上記されたカルボキシル化反応に限定されるものではなく、一般式〔Ⅲ〕で示される化合物をカルボキシル化して置換カルボン酸〔Ⅰ〕にする方法をすべて包含するものであ

る。かくして得られた置換カルボン酸〔Ⅰ〕はさらに分離。精製あるいは更簡化の必要に応じて、適当なアルカリ金属（例えば、ナトリウム、カリウム）、アルカリ土金属（例えば、カルシウム、マグネシウム、バリウム）、その他アルミニウム塩などに當法に従つて対応することが可能である。

本発明方法の目的化合物である置換カルボン酸〔Ⅰ〕およびその塩類は優れた抗炎症作用（抗リウマチ作用を含む）または鎮痛作用を示し、医薬またはその合成中間体として有用な化合物である。

以下実施例において本発明方法の概要を示す。

実施例1

2-フェノキシ-3-クロロメチルビリジン-1-ヨウ化物をジメチルスルホキシドタロムに溶解し、55°Cでからまぜながらアンモニアトリウムのジメチルスルホキシド溶液（46g/45ml）を加え30分間反応させる。冷却後水を加え、エーテルで抽出し抽出液を水洗後炭酸カリウムで乾燥しエーテルを留去すると油状炭酸ニクオを

得る。アルミナカラムクロマトに付し、50%ベニゼン/ヘキサン溶出部より1.15%の2-フェノキシ-3-ビリジンアセトニトリルを得る。

IR_{max} μ^{-1} 2200.

本品2.0gに2.0gの氷化カリウム水溶液10gおよびエタノール100mlを加え水浴上で1時間加热する。エタノールを留去後水を加えて希釈し、遠心で固性とした後氷炭酸ナトリウムでアルカリ性とし、クロロホルムおよびエーテルで洗浄後活性炭で処理する。次いで虹吸で再々に水洗し氷炭酸ナトリウムで中和しエーテルで抽出する。抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去すると2-フェノキシ-3-ビリジンタリウムを得る。エーテル/ヘキサンより再結晶すると中性タリウムを示す。 IR_{max} μ^{-1} 2500, 1910, 1730.

実施例2

2-フェノキシ-3-（2-ハイドロキシエチル）ビリジンタリウムを四氷化炭素20mlに溶解し-3～0°Cで三臭化リンの四氷化炭素溶液（2.1g/10ml）に30分を以て滴下した後さらに

2.0分間遠紅で反応させ、次いで室温で一夜放置する。反応液を冰水中に投入し氷炭酸ナトリウム水溶液で中和した後クロロホルムで抽出する。抽出液を乾燥後クロロホルムを留去し油状炭酸として2-フェノキシ-3-（2-ブロモエチル）ビリジンムタリウムを得る。本品は前記することなく次工程に用いる。

本品1.9gを新たに調製したテトラヒドロフラン100mlに溶解し、密閉気流中からまぜながら-30°Cでブチルリチウム（1.06mmol）3.9gを加え10分間反応させた後、活性炭ガスを2時間半導入する。冷却下に虹吸で加え混合液を分離した後テトラヒドロフランを留去し、母液をエーテルで抽出する。抽出液を水洗、乾燥後モードルを留去し、残渣に氷炭酸ナトリウム水溶液を加えて再溶解しクロロホルムおよびエーテルで洗浄する。活性炭で過濾後母液とエーテルで抽出し、抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去する。醇エーテルより再結晶し中135～135.5°Cの2-（2-フェノキシ-3-ビリジル）ブロピカ

ン口を得る。

S-フェノキシ-3-(2-クロロエチル)ピリジンを用いて同様の結果を得る。

IR_{max} cm⁻¹ 2400, 1900, 1725.

実験例3

金属マグネシウム 5.2g を窒素気流中かきまぜながらテトラヒドロフラン 30ml に溶解し、臭化エチル 0.3ml を加える。この反応液に S-フェノキシ-3-(2-プロモエチル)ピリジン 1.4g と臭化エチルのテトラヒドロフラン溶液 (0.7 ml / 1.5 ml) を 15 分を経て滴下し、次いで 1 時間攪拌する。さらに若干のマグネシウム炭粒を含るので臭化エチル 0.3ml を加え 3 分攪拌する。次いで 1/2 でに捨却して脱脂炭酸ガスを 3 時間導入する。10 g 硫酸で化合物を分解しロバードテトラヒドロフランを留去し残渣をエーテルで抽出。抽出液を水洗後エーテルを留去し残渣を硝酸銀ナトリウム水溶液 6.0 g およびエタノール 6.0 ml の混合液に溶解し、6 時間攪拌する。エタノールを留去後水を加えて希釈し、過量で酸性とした硫酸炭酸ナトリウムでアルカリ性としてクロロホルムおよびエーテルで洗浄。水洗で再びに脱脂炭酸ガスで抽出。抽出液を水洗、脱脂炭酸ガスを留去し、油状残渣 2.0 g として S-フェノキシ-3-(2-シアノエチル)ピリジンを得る。

脱活性炭で処理する。粗物で粗々に回収し析出する沈殿を戻取、水洗。乾燥すると $\Delta/\Delta' \sim 1.34$ のユー (S-フェノキシ-3-ビリジル) ピリオンドを得る。脱脂エーテルより再結晶すると、 $\Delta/\Delta' \sim 1.35 \sim 1.355$ の結晶を得る。

実験例4

実験例1と同様に反応を行い、2-(3-クロロメチルフェノキシ)ピリジンから 3-(2-ピリジルオキシ)フェニル酢酸。中 1.70 ~ 1.12 を得る。

実験例 6-75

実験例1と同様に反応を行い、下記の化合物を得る。なお下記表中で用いられる略号は下記の意味を表す。

M: メチル基 M₂: メトキシ基
Et: エチル基 iso-Bu: イソブチル基
Ac: アセチル基 An: アニリノ基
Ca: カルシウム塩 Al: アルミニウム化合物
d: 分離点

特許 第30-76072(6)

洗、脱脂炭酸ガスを留去し、 $\Delta/\Delta' \sim 1.34$ のユー (S-フェノキシ-3-ビリジル) ピリオンドを得る。脱脂エーテルより再結晶し、 $\Delta/\Delta' \sim 1.35 \sim 1.355$ の結晶を得る。

実験例5

S-フェノキシ-3-(2-プロモエチル)ピリジン 2.78 g をジメチルスルホキシド 2.0 ml に溶解し、5.5 °C でかきまぜながらシアノ化ナトリウムのジメチルスルホキシド溶液 (5.30 g / 4 ml) を加え 3 時間反応させる。冷却後水を加えエーテルで抽出。抽出液を水洗、脱脂炭酸ガスを留去し、油状残渣 2.0 g として S-フェノキシ-3-(2-シアノエチル)ピリジンを得る。

IR_{max} cm⁻¹ 2250.

本品は前回することなく次工程に用いる。

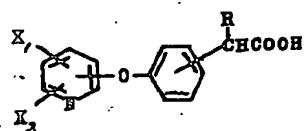
本品 2.0 g を 3.0 g 過酸化カリウム水溶液 6.0 g およびエタノール 6.0 ml の混合液に溶解し、6 時間攪拌する。エタノールを留去後水を加えて希釈し、過量で酸性とした硫酸炭酸ナトリウムでアルカリ性としてクロロホルムおよびエーテルで洗浄。水洗で再びに脱脂炭酸ガスで抽出。抽出液を水洗、脱脂炭酸ガスを留去し、油状残渣 2.0 g として S-フェノキシ-3-(2-シアノエチル)ピリジンを得る。



संख्या	प्रतिक्रिया उत्तर	र - Δ -	Y ₁	Y ₂	Y ₃	Y ₄	फॉर्मूला
36	α	HO - 3 - O	H	H	- COOH	H	Ca / 077-107
37	α	HO - 3 - O	H	H	- COOH	H	Ca / 022-022
38	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	Ca / 035
39	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	113-164
40	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	132-132
41	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	113-120
42	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	143-143
43	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	136-137
44	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	206-206
45	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	113-120
46	β	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	130-139
47	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	120-121
48	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	133-136
49	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	92-92
50	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	113-116
51	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	94-97
52	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	135-137
53	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	113-122
54	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	132-132
55	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	90-91
56	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	103-106
57	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	72-77
58	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	86-87
59	β	H - 6 - O	H	H	- COOH	H	130-131
60	β	H - 6 - O	H	H	- COOH	H	103-106
61	β	H - 6 - O	H	H	- COOH	H	86-87
62	β	H - 6 - O	H	H	- COOH	H	130-131
63	β	H - 6 - O	H	H	- COOH	H	202-202
64	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	123-124
65	α	HO - 2 - O	H	H	- COOH	H	103-104
66	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	126-129
67	β	HO - 6 - O	H	H	- COOH	H	113-114

क्रमांक	प्राप्ति का अनुपात वर्षों में	संकेतक	$\text{R}-\Delta-\text{X}_1$	X_2	Y_1	Y_2	Y_3	$\varphi^{\circ}(\text{O})$
45	3	१२	५-०	H	३-१२	५-१२	५-१२	१५३-१५६
69	3	१२	६-०	H	२-१२	६-१२	६-१२	३३-३६
70	3	१२	६-०	H	३-(CH_3) ₂ -	H	C≡C	६७८
71	0	१२	२-०	H	२-१२	३-१२	३-१२	२५०-२६६
72	0	१२	२-०	H	३-१२	६-१२	३-१२	२५०-२७८
73	3	१२	६-०	H	२३-(CH_3) ₂ -	H	C≡C	६६६
74	3	१२	६-०	H	३-१२-८९७	H	H	१२०-१२५
75	3	१२	६-०	H	२.३-८९७	H	H	१३५-१३२
76	3	१२	६-०	५-१२	५-१२	H	H	१४५-१४५
77	0	१२	२-०	५-१२	५-१२	H	H	१३.२-१३.७
78	3	१२	६-०	५-१२	५-१२	H	H	१२२-१२९
79	3	१२	६-०	५-१२-(CH_3) ₂ -	H	H	H	१३.१-१३.२
80	3	१२	६-०	H	३४-(CH_3) ₂ -	H	H	१२३-१२५
81	3	१२	६-०	H	३-१२	H	H	६२.५-७०.५
82	3	१२	६-०	२१८	५-१२	H	H	८०.३-१०८

卷之三



通じ、3-[(6-((2-ピリジルオキシ)-2-ナフチル)プロピオン酸]を導く。 $\text{mp} 197\text{--}198^\circ$

特许出口人：道贝拉公司

代 憇 人 · 弗 罗 士 岩 首 光

試験番号	X ₁	X ₂	フェノキシ基の位置	の位置	ECD(%)		T _d (°C)
					B	A	
83	H	H	3	3	15	76~77	
84	H	H	3	3	15	110~111	
85	H	H	3	5	15	129~130	
86	9-CH ₃	H	3	4	15	198~200	
87	5-COOCH ₃	H	3	4	15	211~212	
88	H	H	3	5	15	130~131	
89	H	H	5	5	15	180~181	
90	3C-(CH ₃) ₂ C		3	5	15	166~167	
91	3,5-ベンゾ		3	5	15	142~143	
92	5-Me	5-Me	3	5	15	193~195	
93	4-Me	5-Me	3	5	15	162~163	
94	4-Me	H	3	5	15	135~136	
95	6-Me	H	3	5	15	273~275	

實錄卷 96

3-(エーブロモエチル)-6-(ヨ-ピリジルオキシ)ナフタリンを実質例1と同様に反応始

件号 1350-760720

手冊端正

七言律詩卷之二

卷之三

昭和年月日

4 前卷以外の發明者

キクダム ヒガハタカチヨウ
大阪府岸和田市貝ヶ丘町808の3
ヒロ々々 カツミ
広 口 國 己

锦府厅母官

6. 対象の発示 国税48年管庁口第 12518号

2 発明の名称

日暮駅の駅構体の設置法

正をすする者

事件との關係 特許出回人

住所 大阪府大阪市西区門真町3丁目1-3

名義 (1823) 植物植物植物植物
シカノサセイナ

カシ トシ カヌ カヌ

卷之三

作者：大慶市望族小學 五年級 4 班

新嘉坡日報社會版

卷之三

五、中国古典文学名著 第一册

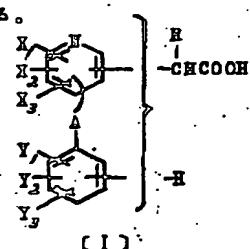
支拂金額益知の日付昭和一年一月一日受取日付
（行印）

138 正の財産

開口鳥の親鳥の雄性を巣門の口

人修正の内容

(1) 明細書3頁の化学構造式(1)を下記のように訂正する。



(四) 図書館ノヨリ下から6行目の「表わす。」を
「表わし、-△-□において例えば □-○はピリシン
の△位がエーテル結合をしていることを表わし、
 X_1 , X_2 , Y_1 , Y_2 および Y の各々の□において例え
ば □-C₆H₅ は母核の△位をクロルが□表しているこ
とを表わす。以下の実例においても同様である。
に訂正する。

〔注〕上段におけるカルシウムは真白切玉の

それは、水和物であり、実験例 2 では水和物、
実験例 3 4 および 3 9 では 1 水和物、実験例 6 3、
7 0、7 3、7 7 および 8 3 では 1.5 水和物、实
験例 1 8、1 9、3 3、3 7、6 1 および 6 3 で
は 2 水和物であり、実験例 3 6 および 3 8 では 4
水和物である。1

約開音節ノク頁の段の下に下記の文を挿入する。
〔注：交換開音節のカルシウム塩は水和物である。〕

上

第 55 6.14 発行

特許法第17条の2による補正の掲載
昭和48年特許出願 133187号(特開昭
50-76072号 昭和50年6月21日
発行公開特許公報 50-761号掲載)につ
いては特許法第17条の2による補正があったので
下記の通り掲載する。

Int. Cl.	記号	序内整理番号
C07D213/81		7138 4c
213/84		7138 4c
215/20		7306 4c
217/24		7306 4c
II A61K 31/44		6617 4c
31/47		6617 4c

手 書 補 正 の

ナロウロモ代えモト

昭和55年3月12日

特許庁長官 殿

1. 本件の公示 昭和48年特許出願 133187号

2. 発明の名体

口説辟口易身体の製造法

3. 補正をする者

本件との關係 特許出願人

住所 大阪府大阪市東区北新町3丁目1-2号地

名称 (193) 岩崎製薬株式会社

代表者 吉利一雄

4. 代理人

住所 大阪市西区曾根崎5丁目1-2番4号553-14

松島製薬株式会社特許部

(電話06-458-5861)

氏名 弁理士(6703) 岩崎光

女優化粧品の日付 昭和 年 月 日 (満期日)



5. 補正の対象

明細書の「特許請求の範囲」および「発明の特

徴とその説明」の項。

6. 補正の内容

(1) 特許請求の範囲を別紙のとおり訂正する。

(2) 図面図3頁下から4行、6行、6-5行、6行および3行の「あるいは」を「または」に訂正する。

(3) 同図6頁8行および末行の「あるいは」を「または」に訂正する。

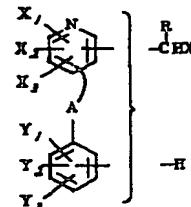
(4) 同図7頁11行および13行の「あるいは」を「または」に訂正する。

以上

(別紙)

2. 特許請求の範囲

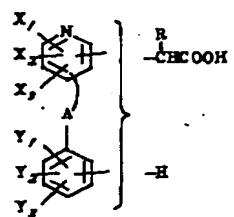
一般式



(式中、X₁、X₂、X₃、Y₁、Y₂およびY₃はそれぞれ
水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシル
基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、シア
ノ基、水酸基、アシルオキシ基、アシルアミノ基、
トリフルオロメチル基、またはハロゲンを表わし。
これらの官能基のうちの任意の2官能基が結合し
てピリジン環またはベンゼン環に結合する脂環
またはベンゼン環を形成してもよく、Xはハロゲン
を表わし、Aは凸頭または凹頭を表わし、Rは水
素または低級アルキル基を表わす。ただし上記一

昭 55 6.14

式中の ---CHX 基は 2 個の置換基により形成された
ベンゼン環上に存在してもよい。」
で示される化合物をカルボキシル化反応に付して
一般式



(式中、 X_1 、 X_2 、 Y_1 、 Y_2 、 A および R は
前記と同意義を表わす。)
で示される化合物を得ることを特徴とする置換鉄
錯化合物の製造法。

(以上)

— 64 —